九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

預金貨幣の生成と構成

高木, 暢哉

https://doi.org/10.15017/4151186

出版情報：經濟學研究. 9 (3), pp.1-37, 1940-07-30. 九州大学経済学会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

預金貨幣の生成と構成

高木暢哉

目次

一　序
二　預金及び出納預金
三　預金振替制度の發生とその態様
四　直接的實質的預金
五　擬制的預金
六　間接預金
七　出納預金の現實的機構

一　序

所謂預金貨幣が今日の貨幣流通機構においていかに顯要なる役割を演じつゝあるかは、屢々論ぜられ

るが如くである。[註一] 人によつては、預金貨幣が今日の通貨の支配的部面を占めるといふ點に着目して、現時の社會を信用經濟と呼ぶものもあるが、[1] 勿論預金通貨の量的顯要性を高揚する一表現として見れば、首肯されるものがある。とはいへ人の屢々論ずるやうに、預金貨幣の通貨としての單なる量的優越性、使用の壓倒性の故をもつて、信用貨幣が今日の貨幣制度の本質的中核であり、所謂現金制度はこれに附隨的補足的な派生的制度であると斷ずべきであらうか、[註二] 乃至はそれを、流通技術の缺陷乃至は惡を代表する可及的克服さるべき舊世紀的遺物であると見るべきであらうか、況んや流通において量的に壓倒的なる無現金取引の究明によつてえた知識をもつて貨幣論の第一次的概念となし、この概念に發して逆に現金貨幣の本質を論斷せんとするのは、いかにして當をえた方法であるといへるであらうか。ハーンは不當にものべる。「今日においては、現存の現金が信用供給の基底となり、これに或る代替物が市場の擴大として追加されるのではない。逆に、今日の信用供給の大部分を、否多くの市場の全部分をさへも占めるのは、現金以外の資金である。かくて現金は極めて非本質的なる・屢々全くあるかなきかの役割しか演ずるにすぎない。勿論貨幣は、疑もなく貨幣市場の始源を意味するものであるが、然し理論的考察が問題となるときは、貨幣より出發するのは論理的に誤である。寧ろそうではなく、貨幣を理論的考察より除去し、唯修正的要素として觀察の範域にとり入れるべきである」[2] と。

勿論、今日の取引の大部分が無現金取引であるといふ事は事實である。否それは我々の分析の正に始

1) 中谷實著　新金融論 15 頁
2) A. Hahn, Volkswirtschaftliche Theorie des Bankkredits, 2 Aufl. 1924, S. 18.

發さるべき直接的所與であらう。然し我々の分析は、單に無現金取引の量的優位、現金取引の量的劣弱の事實よりして、量的に大なるものが本質的、量的に劣少なるものが派生從屬的と、唯に平盤的に論ずべきではない。我々は所與の假象の底に、その量的優差を超克して質的構成聯關を看破しなければならない。分析は平盤的であるべきでなく、立體的、主體的に、二つの取引を構成聯關的に明らかにすべきであらう。一つは他のよつて立つ基礎として、他はその上に立つ構造物として。かゝる主體的構成論理の上に立つならば、量的に優越である無現金取引は現金取引にとつて派生的なる構造物となり、量的にはあるかなきかの現金取引が却つて一切の複雜多岐なる無現金的貨幣制度の基礎であることが、知られるのである。我々は所與の假象の底にそれにとつて基底的前提的である現金取引を洞見し、その洞見に發してこれを逆に、所與をその構成的發展として發生的に演繹しなければならない。ハーンは現實の構成的主體的構造を平盤的にとらへ、構成されたる・從つて派生的なる預金貨幣を、それが現象的には量的に顯著であるの故に本來的であるとみなし、基底的・始源的なる現金取引を、その外形的陰微の故に實に補足的であると斷じたのである。正しく論理の顚倒であらう。のみでない。進んでは、無現金經濟の想定に出發し、現金が尙補足的に授受される現實の經濟の諸事實は、無現金經濟の分析によつてえた理論的成果の若干の修正によつて說明されうると見なした。[3] 然しそれは論理的にも歷史的にも、後なるものをもつて先なるものを說明せんとすることである。我々は所與をそのあるがまゝの構造に從つて推

3) Hahn, ibid., S. 25.

斷しなければならない。現金取引は無現金取引にとつての前提である。後に明らかにする如く、現金の直接的預入に基づく實質的預金振替制度は、空虚なる全く名目的なる預金を基礎として行はれる擬制的預金振替制度の起點であり且つ始源である。我々は以下において、歷史的にも論理的にも先行する所のものゝ解明に出發して、現實のあるがまゝの預金振替制度の構造本質を、構成聯關的に、從つて發生論的に、演繹推論して行かうと考へる。

註一　フオスターは、米國における凡ての貨幣の媒介を要する取引の中、八〇%より九〇%は銀行預金による、と述べてゐる。(Foster and Catchings, Money, p. 28.)

註二　例へばケインズは、英米において預金貨幣〔彼の呼稱によれば銀行貨幣(Bank-Money)〕の流通貨幣總額中%占むる地位は約九〇%、從つて流通現金量〔彼の呼稱によれば國家貨幣(State-Money)〕は全流通貨幣の一〇にすぎぬといふ立場から(Keynes, A Treatise on Money, 1930, Vol. I, pp. 31—)彼の尨大なる貨幣論を、專ら銀行貨幣の貨幣論として展開してゐる。

ホートレーによれば、第一次的な交換手段は信用であつて、銀行は信用の取引商人である。貨幣は唯第二次的に信用の究極的決濟手段として要請されるにすぎない。(Hawtrey, Currency and Credit, chap. I, Credit without Money)

註三　この點ホートレーの方法も同樣である。(R. G. Hawtrey, ibid.,)

二　預金及び出納預金

預金振替制度の出發點は單なる預金である。では預金の本質は何であるか？　又單なる預金はいかにして複雜なる預金振替制度に迄自己を展開止揚せしめたのであるか？

周知の如く預金は貨幣の寄託である。從つて預金におのづから二つの側面がある。第一に、寄託される對象に即して見れば、寄託されたる貨幣はそのまゝ銀行の庫中に保管される。第二に、當事者間の關係に即して見れば、預金者は寄託上の要求權を取得し、銀行は債務を負ふ。即ち、預金は對象的には貨幣の寄託的保管であり、關係的には寄託上の債權債務關係の結成である。然し寄託される貨幣にはおのすから性質を異にする二種の貨幣があるから、單なる預金にも更に二種の預金が區別される。

預託される貨幣は、勿論預金者にとつては使用されざる退藏貨幣であるが、然しそれには次の如き二種がある。一つは預金者によつて近く再び支出される迄暫時休息する貨幣、即ち一時的休息貨幣であり、二は差當り特定の使途を有せず、從つて長期に亘つて休息する絶對的な退藏貨幣である。前者は商人や生産者達の不斷に收支する現金の中時々手許に遊休する一時的休息貨幣であるから、銀行に保管されると共に時々引出される。銀行は保管し記帳し且つ出納する。從つてかゝる種類の預金は、預金者の貨幣の收支出納を媒介をする出納預金であるといふべきであつて、この際銀行の營む業務は純粹に貨幣取

引業務である。然るに第二の形式の預金においてはさうでない。それは出納され收支される・流通的な預金ではなく、絶對に流通せざる固有の意味での退藏貨幣である。尤も、一切の貨幣が自己增殖的な貨幣資本として利用されうる乃至は利用さるべき今日の社會においては、貨幣を單に絶對的な退藏貨幣として銀行の庫中に保管すべきでない。使途なき休息貨幣は銀行によつて放資されんことを求めて預託され、銀行も亦放資すべく預金を受託する。而して投資の主形式は貸付であるから、貨幣は貸付資本として預託され、銀行は貸付業務を經營する。預金はこゝにおいて投資預金となる。それはもはや、出納預金におけるが如く、現實に通貨として收支出納されるものではない。預託された貨幣は放資されてそのあとには空虛なる預金名義のみが殘留する。他の用途に他用（andersverwenden）された預金は、實體現存的な預金ではなくて、名義をおける預金乃至は空虛なる預金となる。[註三註三]

尤も右の投資預金と出納預金との別は現實においては必ずしも鮮明でない。[註四]後にも述べる如く、出納預金は投資預金に轉換し、投資預金が逆に出納預金に轉換することがある。然し現存する所の、且つ現に機能しつゝある預金は大體において右の二に區別することができる。これに應じて銀行業務は貸付（乃至は投資）業務と貨幣取引業務との二に分たれる。勿論我々がこゝに問題とする預金振替取引は後者に屬するであらう。何故なら、振替預金はそれ自身複雜化せる出納預金であるから。先づ單なる貨幣寄託としての預金は、私個人の收支記帳を掌る最も單純なる出納預金となる。次いでこの出納預金は特殊

なる振替操作と複合することによつて、多數の出納預金者の收支を振替決濟する振替上の出納預金となる。卽ち單なる預金が先づ最も單純なる出納預金となり、次いでかゝる出納預金が振替的出納預金となるのであつて、それは單に預金形式の出納預金の方向における發展複雜化である計りでなく、銀行の貨幣取引業務の發展多樣化でもある。勿論それは、一方では預金の槪念として理念としての展開であると共に、他方では現實の歷史によつて媒介された經濟史展開であるから、我々は更に以下において、かゝる具體的事實によつて媒介された預金振替制度の發生史を檢討しなければならぬ、乃至はかゝる發生史を介して實現せしめられた槪念の論理的展開を明らかにしなければならない。

註一　投資の他の形式は生產企業等への直接的投資であつて、主として證券（株式）投資の形をとる。

註二　投資預金と出納預金の別については尙多くを述ぶべきであるが、今はその餘裕を持たない。唯簡單にケインズの區別をあげる。ケインズによれば、預金は大別して現金預金(Cash-deposits)と貯蓄預金(Savings-deposits)とに分たれる。前者は「日常」の「諸支拂をなす爲に保持され」(Keynes, ibid., pp. 41, 43.)「貨幣への卽時の支配を供すること」をその特色とする (ibid., p. 41)。後者は「支拂目的の爲ではなく、貯蓄を利用する一手段として保有される」(ibid., p. 36.)。ケインズの區別の標準は「預金の保有される目的」にある。然りとすれば、第一の現金預金は出納預金と稱して適當であらう。そして第二の貯蓄預金は槪念としてあまりに狹少である。なぜなら出納の爲でもなく又貯蓄の爲でもない預金があるからである。例へば會社の償却金積立の如し。

註三　尙、投資預金は、現實には、我國においては、大體特別當座預金、定期預金、通知預金等を含む。これに對し

て出納預金は當座預金と一致する。英國では deposits-account（預金勘定）が投資預金であり、current-account（當座勘定）が出納預金である。米國では前者を time-deposits（定期預金）後者を demand-deposits（要求拂預金）と呼ぶ。

註四　「銀行實務より生ずる分類の困難はさておいて、貯蓄預金と現金預金との間の境界は、預金者自身の意識においてすら明らかでない」(Kenynes, ibid., p. 33.)

三　預金振替制度の發生と態樣

貨幣流通に不可避的な技術的操作、即ち貨幣の保管記帳出納兩替等の如き特殊の流通操作が獨立の業務として營まれる貨幣取引業務は、貨幣の流通從つて商品の流通の發生發展と共に、生起し且つ發展して來た。神殿や私個人における保管の爲の保管は、やがて特殊の貨幣商人が顧客に代つて出納記帳する單純なる出納預金に迄發展する。今、かゝる單なる出納預金が一般に盛行し、特定の貨幣商人（現實には金商、大商人等）を繞つて、これをして自己の貨幣を出納せしめる商人並びに生產者の數が著しく增大したものと假定する。然らば取引は更に次の如くに推轉するであらう。今やこれらの顧客は同一貨幣商人に預金し、同一貨幣商人をして出納記帳せしめてゐる。從つて彼等は、相互の受拂に關する限りは一々貨幣商人をして現金を支拂はしめる必要がないであらう。取引の簡捷の爲に、顧客Aは顧客Bに自己の預金宛に支拂指圖書を振出しこれをBに交附する。交附をうけたBはこれを貨幣商人に呈示し、貨

幣商人はこれに對し現金を支拂はずして、自己の手許においてAの預金の一部をBの預金に記帳的に移轉するであらう。Aの預金は現實に移動せずして從つて貨幣商人の手許にあつて不動のまゝ、記帳の一瞬において帳簿上所有權を變更する。[註一] 貨幣の授受を空間的にも時間的にも簡捷化するこの種の取引は、現金取引に不可避の制限や流通費用を除去するから、それはヨリ有用にしてヨリ發展せる流通技術である。かくて記帳上の振替は一般に普及し、一貨幣商人を中心に振替取引する顧客の數もおのづから增加し、貨幣商人の經營規模も當然に擴大するであらう。かくして一般化された振替操作は制度として固定され、こゝに異色ある振替貨幣制度が成立し、他方經營を銀行的規模において擴大した振替商人は所謂振替銀行（Girobank）となり、[1] そして支拂指圖書は、所謂小切手乃至は手形として、一般に購買乃至は支拂の手段として授受される。[註二]

註一　「然しかうした銀行貸方勘定は、同時に支拂手段としても機能することができる。蓋し、それは、その所有者をして、その讓渡によつて卽ち一の勘定より他の勘定への振替によつて支拂を行ふ事をえしめるからである。然かも、銀行は預入された貨幣を返還する要はない。」(M. Bouniatian, Die vermeintlichen Kreditkreierungen und die Konjunkturschwankungen, in : Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik, 136 Bd. (1932) S. 342)

註二　一般的必然的なる貨幣制度としての預金振替制度の前提としては、商品流通の發展に伴ふ單純なる出納業務の一定規模における發展が要請されるのであるが、部分的偶然的なる貨幣制度としては、未發達未展開の姿におい

1) Vgl. A, Wagner, Die Geld–und Kredittheorie der Peelschen Bankakte, 1920, S. 93.

て、それは古く古代に遡る事ができる。O. Schoele によれば、バビロン、エジプトの昔において既に振替取引は行はれてゐたといふ。(O. Schoele, „Zahlungsverkehr", im Hwb. d. Btw. Stuttgart 1928) 又ローマにおいても、既にキリスト在世時代より無現金取引が行はれ、銀行業務においては、貸付業務と貨幣取引業務との明確なる分業が見出されるといはれてゐる。argentario と呼ばれるものは預金貸出兩替を營み nummulari は純然たる預金振替業務を營んだ。(vgl. Bruno Hildebrand, Natural-, Geld-, und Kreditwirtschaft, Hildebr. Jahrbuch II Cd. 1864, S. 1) 然し萠芽的な從つて偶然的畸形的であつた預金振替制度が展開された必然的一般的貨幣制度として顯着となつたのは、商品流通の盛んとなつた中世以降に求めねばならぬ。イタリー、ロムバード人の金匠に預託された貴金屬に對する手形振出及びそれによる決濟、フランス歲市における振替決濟の發達等の如き。特に十四世紀の頃より振替制度は發券制度と相併行して、イタリー及び獨逸に發達した。一五八六年イタリーゼノアに設立された S. Georgio 銀行、一六〇九年のアムステルダム銀行、一六一九年のハムブルグ銀行の如きは有名である。これらは最初の發券銀行であると共に最始の振替銀行でもあつた。(Vgl. Stähler, Der Giroverkehr, seine Entwickelung und internationale Ausgestaltung, 1909.)

尤も以上の如き純粹に記帳による預金振替は、一つの理念型であつて現實的ではない。今日普通に行はれる預金振替取引は同一銀行に預金を有する顧客間のみに限局されるものではなく、一銀行の預金者と他の銀行の預金者との間において、乃至は一銀行の預金者と何等銀行に取引關係なき當事者との間にも、行はれる。後の場合には、記帳上の預金振替に代つて、現金が現實に移動する。一銀行の預金者と他の銀行の預金者との間の取引においては、預金者の小切手移動の方向に向つてその取引銀行間におい

て現金の移動が生ずる。例へば、AのBに對する小切手振出に伴ひ、Aの甲銀行における預金はBの取引銀行たる乙銀行に現實的に從つて空間的に移動せしめられ、結果として、Bの乙銀行における預金にそれだけの現金が現實に附加される。又、一銀行の預金者が何等銀行に振替取引を有せざる人に小切手をもつて支拂ふ場合には、現金は銀行と小切手持參人との間に移動する。例へばAの甲銀行における預金は小切手持參人Cに現實に支拂はれる。いづれにせよ、行はれるものは無現金的な記帳上の振替ではなく、現金的な現實の貨幣の授受である。それは預金の記帳的移動即ち無現金取引を理想とする預金振替制度の理念からいへば、不完全なる從つて畸形的なる振替制度であるといふべきであらう。勿論、現行の振替取引は、同一銀行の顧客間における完全なる預金振替と一銀行の預金者と然らざる者との間の畸形的なる振替取引との合成である。我々はかゝる混合型の振替制度を、純粹に記帳上の振替の行はれる理想的制度と區別して、廣義における預金振替乃至は小切手制度と稱することゝしよう。これに對して、理想型の制度を狹義の預金振替制度乃至は單に振替制度と稱することゝする。前者が主として英米に行はれる制度であり、後者が主として獨逸に顯著な制度であることは人も知るが如くである。

尤も現金授受の不可避である混合型においては、その不完全性を可及的に克服せんとする特殊の流通技術が考案される。即ち交換所における相殺がそれである。[1] 畸形的な振替取引、特に、相異なれる銀行の顧客間の取引によつて生ぜしめられる銀行間の現金移動は、銀行間の債權債務の相互的相殺によつ

1) Vgl. Hahn, a. a. O., S. 37.

て、可及的に極少ならしめられる、のみでない。交換制度の發展は相殺殘高のみの究極的決濟を可能ならしめる計りでなく、この殘高決濟に要する現金移動さへ諸銀行の中央銀行に對する狹義の預金振替によつて不要ならしめる。かくして混合型における振替取引の不完全性は、第一には手形交換による相殺によつて、第二には究極的決濟を純粹なる振替取引によつて行ふことにより、こゝに克服される、現金の現實的移動はその限り不要となるであらう。然し右による克服は未だ現金授受を完全に葬去る程には十全でない。又何等銀行と預金取引を有せざる者の小切手の呈示に對しては、現金支拂をもつて應ずるより外はないであらう。現在の發達せる振替取引が尙かゝる不完全性の殘渣を殘すことは後に特に高調するが如くである。ともあれ振替制度の志向する無現金取引への理想は、混合型においても或る程度迄實現されてゐる、

以下において我々は、今日支配的であるこの混合型を專ら考察の對象としようと思ふ、そして敍上の如くして成立した預金振替制度がいかにして今日の如き複雜多岐なる振替組織に迄發展して行つたかを一つの內面的必然性として追究して見たいと考へる。

四　直接的實質的預金振替

預金振替制度の始發的な形態は、現金の直接的預入に基づく直接的實質的預金振替であつて、それは

歷史的事實に照應するのみならず、[註一] 論理的にも後續するヨリ複雜なる振替制度の推論上の端緒となるものである。勿論それは最も單純にして素朴なる振替制度ではあるが、然し後續する諸種の振替形式の出發點として、それらに一般的なる乃至は萠芽的なる諸種の規定及び要素を內包してゐるから、こゝに稍々詳細なる分析を試みる價値がある。尙、この際直接に預入される現金としては正貨、補助貨、紙幣、銀行券のみを含ましめることとし、小切手及び商業手形はこれより除去することとする。蓋し、小切手の預入を認めた上で預金振替制度を說明することは、說明さるべき振替制度を說明の前提として解明することになるであらうし、他方商業手形は究極的支拂手段とならぬからである。[註二]

註一　リーフによれば、英國における預金銀行は、十七世紀、ロンドン金鍛冶匠に對する公衆の現金の預託に初まるといはれる (W. Leaf, Banking, 1926, p. 14 Cf. R. D. Richards, The Pioneers of Banking in England, Economic History, a Supplement to the Economic Journal, Jan. 1929, pp. 485—)

註二　フイリップスは彼の所謂本源的預金（我々の直接的實質的預金）を構成するものの中に小切手、手形をも含ましめる。「本源的預金は、現金乃至は他銀行宛振出された小切手及び手形の如き容易に現金にかへうべき等價物の、銀行への現實的預入より生ずる預金であると、定義してよいと」と。(Phillips, Bank Credit, 1928, p. 20) 小島博士によれば實質的預金を構成するものは次の三つである。（一）金地金が貨幣的金となつて預金せられる場合、（二）外國よりの受領資金が預金せられる場合（金融動態論二三八頁）。（三）は補助貨政府紙幣（同書二四四頁）そして博士は兌換銀行券の預入は實質的預金の成立とはならないといはれる。（同書二四六頁）然し今日の如くに、發券が特殊銀行に獨占され、國家がその發行する銀行券に法貨たる資格を附與してゐる場合には

銀行券も亦究極的な支拂手段であるといふ意味で現金の中に入れて差支へない。何故なら第一には、いつにても正貨に兌換されうる銀行券は正貨と同等のものであるとして一般に受けとられる。第二に、兌換の停止される場合には、强制通用力が國家によつて附與され、銀行券は政府の不換紙幣と同樣のものとなるからである。ケインズの用語に從へば、それはもはや私的な銀行貨幣ではなくて國家貨幣である。(Keynes, ibid., pp. 6—7)

實質的預金振替制度は、對象的には、預入された現金とこれに對して振出される小切手との對立しつゝ然かも相互に相補足する物と物との構成的聯關として成立する。預金を離れて小切手はなく、小切手を離れて預金はないのであるから、從來屢々行はれた如くに、二者を分裂において考察しそれぞれについてそれぞれの貨幣性を究明せんとするのは、明らかに失當である。統一的なる預金振替制度の構成要素としての二にして一なる預金及び小切手は、相互補足的全體として相關的に考察しなければならない。小切手が預金の支拂指圖書であり、預金が小切手によつて指圖される客體であるといふ平凡なる事實の認識が、却つて、爾後の一切の複雜なる知識に先行すべき第一次的なる明證的知識である。(註一)

小切手は預託された貨幣を指圖する命令書であつて、それ自身の資格において貨幣であるのではない。これに反して指圖される預金は小切手の移轉を介して授受される究極的な客體である。預金は預託される時に既に貨幣であるのみならず、その後も尙貨幣として保管される。それは所有權の直接にして最後的なる對象であるから、小切手による指圖の客體となるのである。小切手の移轉されると共に、預

金の所有權は變換される。振替が同一銀行の預金者間に行はれない場合には、小切手の流通は現金の流通を結果する。然らざる場合、卽ち純粹に記帳による振替の行はれる時には、預金は物理的には不動のまゝその所有權は現實に流通する。小切手の流通はそれの指圖し媒介する預金の不可視の流通の象徵乃至は表現と見らるべきものであらう。この意味で我々は、預金が第一に貨幣であつて、小切手はそれの指圖書にすぎぬと結論しようと思ふ。

尤も、こゝで預金を貨幣であると斷定するときに、我々にはそれを、與えられた貨幣本質論に關する知識に照して判定してゐるのではない。我々は、小切手の振宛てられる預金は、預託される當初において既に貨幣であり、その後も貨幣として保持され、更に貨幣として小切手振當の基體となるといふ意味で、貨幣であるといふのである。卽ち預金は、小切手に先んじて貨幣であり、逆に預金が先づ貨幣であることによつて、これに對する小切手が、それの支拂指圖書として流通しうるのである。從つて、貨幣本質性の設問は流通する小切手に對して向けられる以前に、小切手に先んじ貨幣となり小切手流通の實體的基礎となる預金それ自身に對して向けらるべきであらう。この意味で、貨幣本質に關する定義に出發して、預金が貨幣であるか小切手が貨幣であるかを判定せんとするのは、先づ太陽の光を問題とせずして月の光の光たる性質を究明せんとするが如くである。尤も、預金がいかなる意味においてそれ自身において貨幣であるかは、今論及する餘裕を持たない。それは預託される現金の貨幣的根據を問ふ事で

あり、それ自身貨幣本質論の主題であるからである。[註二]

註一　「小切手とは、本質上、人が銀行における彼の貸方に對して振出す指圖證書である。」(A. Wagner, a. a. O., S. 97)「小切手は銀行預金移轉の證書乃至は證據である」(I. Fisher, Purchasing Power of Money, p. 10)

註二　こゝでは小切手及び預金の貨幣の究明を特に問題としてゐるのではない。實質的預金振替制度の構造の解明に關係ある限りにおいて、附隨的に問題としたにすぎない。從つて預金の貨幣性は、預入される現金の貨幣性の問題として、改めて論ずべき必要がある。

實質的預金振替制度の構造を物と物との關係として見れば大要以上の如くであるが、然しそれのみでは尚皮相的である。物と物との相互補足的全體としての預金＝小切手制度は、單にそれのみでは何物でもなく、唯かゝる對象的手段を介して相對立する經濟主體にとつてのみ、初めて手段たる意義を有するものである。物の關係は寧ろ主體間の關係の對象化乃至は表現として現象的であるといふべきであらう。とすれば、物の關係の中に對象化された人と人との關係とはいかなるものであるか？

第一に、預金は贈與ではなく、返還を約束されたる保管の依頼であるから、銀行と預金者との間の關係は商法上の寄託に基づく債權債務關係である。預金者は小切手を振出すことによつて、寄託した預金に對する要求權を行使しうる。卽ち小切手は預金者の要求權行使の意思の具象化乃至は證券化である。

第二に、要求權行使の意思の具象化である小切手は、小切手振出人より受取人へと讓渡される。何故に讓渡されるのであるか？　普通には、二者の間の賣買を乃至は既に成立した商業上の債權債務を處理

する爲に。卽ち當事者は先づ商業上の購買者と販賣者乃至は債權者と債務者として對立し、次いで小切手はこれらを處理する購買手段乃至は支拂手段として授受される。勿論授受される小切手が、それ自身本性上貨幣として授受されるのではない。それは飽く迄も小切手に先行して貨幣である預金に對する要求權行使の意思の證書にすぎぬのであるが、然しこの紙券に具象化されてゐる要求權が購買乃至は支拂に貨幣的に利用せられるのである。卽ち商品は債務をもつて購買せられ、債務は債務それ自身によつて支拂はれる、從つて購買に支拂に貨幣的に利用せられる具象化された要求權卽ち小切手は、信用を內實とする貨幣的手段であるといふ意味で、正しく信用貨幣である、然かも、唯この意味においてのみ信用貨幣である。[註一]

第三。然し、小切手受取人の受領したものは、銀行に對する支拂要求權にすぎぬ、彼はこれを銀行に呈示し振出人に代つて要求權行使の意思を實現しなければならぬ。券面支拂銀行に呈示される場合には直接的に、第二の銀行を介して取立てられる場合には間接的に。いづれにせよ、小切手の支拂銀行への呈示は小切手に內包された信用關係の實現、卽ち觀念における預金支拂要求權の實體的現實的なる現金への轉化を意味する。然し若し、小切手の呈示者が支拂銀行に預金勘定を有する場合には、振出人の預金の一部の所有權は記帳的に受取人の勘定に移される。

註一　ホートレーはこの點に着目して、信用が卽ち交換手段の本質であるといふ。「信用と債務とは共に等しく交換

手段である。」(Hawtrey, ibid., 2ed. p. 15.)

五　擬制的預金

以上實質的預金振替の分析においては、現金は實質的に預入され且つ現實に保管されるものと假定して來た、小切手受取人は受取つた小切手を支拂銀行に呈示して預託されてゐる現金を受けとることができた。然し、振出された小切手は常に必ずしも現實の預金の移轉を結果するものではない。小切手取引が同一銀行の預金者間に行はれる場合には、單に記帳上の付替が行はれるのみである。又、相異れる銀行の預金者間の取引においては、手形交換による相殺が行はれる。從つて記帳上振替られうる取引及び相殺されうる取引に關する限りは、小切手の授受は預託された現金の現實的移動を伴はない。勿論預金は空間的には不動であるとはいへ、所有權については卽ち觀念的には、流動する。記帳上の振替においては、小切手振出人の預金の一部は、不動のまゝ受取人の預金となる。又相殺の場合には、銀行に支拂勘定を生ぜしめた預金者（他行にまはる小切手の振出人）の預金の一部は、この銀行に受取勘定を生ぜしめた預金者（他行拂の小切手受取人にしてこの小切手による預金者）の預金に移される。然し預金は現實に移動するのではない。預金は實體的には不動のまゝ、唯當事者の觀念においてのみ小切手振宛の對象として、小切手の授受と共に移轉するものと想定される、從つてかゝる想定が支障なく行はれうる

限り、換言すれば記帳的振替及び相殺が圓滑に進行する限り、この現實には流動せざる預金はこの振替取引より脫離しうべき遊休貨幣となるであらう。何故なら、預金の實體的現存はこの特殊の場合に限つて振替取引の必須の條件とはならないからである。預金が他の用途に利用せられ、銀行の帳簿に唯名義的に存在する場合でも、振替取引の運行には支障はないであらう。かくて預金實體は、取引に支障を與へることなく他用しうべき預金、卽ち實質的預金振替取引より遊離せる機能せざる貨幣、休眠貨幣となるのである。銀行はこれを貸付資本として運用し、預金者も亦それを希望する。こゝに出納預金の一部は投資預金に轉じ、他方社會における流通領域の擴大は、かゝる休息貨幣をおのづから吸引し去るのである。[註一]

尤もこゝで預金の實體的現存が必須でないといふことは、苟くも預金が必須でないといふことと同一でない。既に述べた如く、小切手はその指圖する預金と相互補足的聯關關係に立つのであるから、それは必然にその指圖の當體である預金の存在を必要とする。卽ち預金の現存は小切手制度にとつては制度上不可缺の必然事であるが、然しその實體的現存は必ずしも不可缺ではない。預金は、單に觀念的に現存するだけで、足るのである。預金の一部は他に轉用され、預金は單に帳簿上名義的に現存するにすぎないのであるが、尙且つ振替取引は遺憾なく遂行される。蓋しこの空虛なる預金部分に對して振當てられた小切手は、すべて記帳的振替乃至は相殺を伴ひ、預金の現實的授受を必要としないからである。我

々は以下において預金の實存せざるに拘はらずその現存を帳簿上擬制し、この擬制されたる名義上の預金に基いて振替取引を行ふ振替形式を擬制的預金振替と稱することとし、預金の實體的現存に基づく取引、即ち實質的預金振替と區別しようと思ふ。[註二]

右の如くして擬制的預金は、實質的預金中記帳的移轉乃至は相殺によつて取引されうる部分が他用可能となる事によつて成立するのであるから、その大いさは專ら記帳的移轉及び相殺の範圍に依存するであらう。小島博士の計算によれば、我國の交換所加入銀行の受拂する預金一〇〇〇につき、四七六は交換所を經由して相殺され、二五五は自己宛小切手であつて直ちに帳簿の上で振替へられ、合計七三一の無現金取引が行はれるといふ。他方、交換殘高として支拂はれる現金は一一九、直接現金で支拂はれる額は一五〇、合計現金支拂は二六九である、[1]と。今若しこの比率に從ふならば、預託された一〇〇〇の實質的預金につき、二六九を現金準備とし、七三一を他用することが出來るであらう。即ち機能する預金貨幣中二六九は實質的預金、七三一が擬制的預金となるであらう。この場合の支拂準備率は二六・九%である。[註三]今かくして經驗的に定められた現金準備率をrとし預金總額をdとすれば、drが支拂準備として實體的に現存し、$d(1-r)$が他用されうるであらう。即ち前者はそのあとに擬制的預金を殘すであらう。

註一　シュムペーターはいふ。「然し現金預入によつて生じた出納勘定が問題となり、顧客の處分權の一部が記帳振

1) 小島博士　金融動態論 313—314 頁

替の方法で決濟される故にその一部を銀行が貸付けうる場合には、預金者と受信者とは相並んで、同一金額を恰もそれが全く倍加されたかの如く、處理するであらう」と（Schumpeter, Die Goldene Bremse an der Kreditmaschine, in : Die Kreditwirtschaft, I. S. 85.）然し、實質的預金の他用は同一金額の倍加であるが、同一貨幣實體の二重化ではない。先づ實體的な遊休貨幣が他用され、現金として機能し、他方、他用の後に生じた空白なる名義としての預金が、觀念上の貨幣として無現金的振替の對象となる。（後述二五頁參照）

註二　實質預金と擬制的預金は預金實質に基づく別である。換言すれば、小切手振宛の對象たる預金が實體的に現存するか否かの別である。從來この擬制的預金は種々の名をもつて呼ばれて來た。次の如し。然しその意味は必ずしも我々のそれと同一でない。nominal deposit (Mill), Buchkreditdepositen (Cassel), Buchgeld (Neisser), Überweisungsgeld (Cassel), Formale Kaufkraft (A. Weber), unechte Depositen (Schumpeter), negative Depositen (Sombart), Giralgeld (Bendixen), (Vgl. V. F. Wagner, Geschichte der Kredittheorien, S. 149.)

尙こゝに注目すべきは、極めて創意にとむ小島昌太郎博士の實質的預金と創作的預金の別である。「實質的に成立した預金といふのは、貸付割引と關係なくして成立した預金をいひ、創作的に成立した預金といふのは、貸付割引の手取金が直接又は間接に振替へられて成立した預金である。前者は實質的預金といひうべく、後者は創作的預金と名附けることをうるであらう。この區別はその成立の原因より見たるものである」（金融動態論、二二五―二二六頁）預金をその成立原因より見て、直接的預入によつて生じた預金が實質的預金、貸付割引を介して間接的に成立した預金が創作的預金であるとされてゐる。即ち次に述べる我々の直接預金と間接預金の別に對應するものである。然し博士は必ずしもこの立場を固守されない。他の場所では實質的預金と創作的預金の別を預金

實質の差違に基づく別とし、前者は正貨乃至は正貨に準ずる價値物による預金であり、後者は然らざるものによる預金であるとされてゐるやうである。（同書二三八頁以下、三二七、三二八頁）もしそうであるとすれば、博士の實質的預金と創作的預金の別は我々の實質的預金と擬制的預金の別に對應するであらう。

註三　尤も現金に關しては、流出する現金があると共に流入する現金もある。從つて現金準備は二六・九以下であつて差支へないが、勿論それは理論上の最低限である。實際上は、不時偶發的の支拂要求にも備へねば堅實とはいへないから、この最低準備率に更に若干を加へたものをもつて支拂準備とする。然し我々は以下において、簡單の爲に、現實の支拂準備はこの理論上の準備率に一致するものと假定しておく。（相賀實著銀行の原價計算事務四九頁參照）

六　間接預金

さて以上の如くして、實質的預金の直接的預入に基づく振替取引は、一部預金を遊離せしめ、同じく預金と稱せられるもの〻中にも實質預金と擬制預金との分離を生ぜしめ、前者は後者の支拂準備となり後者は前者の基礎の上に立つ名義としての預金となるのであるが、然しこの資金遊離と他用との一聯の過程は、その後に更に頗る深刻なる影響を及ぼすものである。卽ちかくして成立した擬制的預金は、更にその後に至つて擴大され普遍化され恒常化され、こゝに制度として固定化された無現金取引を全面的に發生せしめるのであるから、我々は當然にかゝる一聯の過程を究明しなければならない。いふ迄もな

く探求は二つの方向においてなさるべきであらう。一つは遊離した資金のその後の運動如何。二は、資金他用の後に成立する擬制的預金の推移如何。先づ第一より問題として行かう。

先にも述べた如く擬制的預金は、資金の遊離と他用との二様の過程の直接的複合として成立する。先づ擬制的預金が成立する爲には、預託された實質的預金の一部が振替取引に内在する特殊の理由によつて不要となるといふ技術的社會的事由が成熟してゐなければならない。次に、かくして遊離した一部資金が現實に産業界より需要せられ流通に産業資金として吸引されるといふことが不可缺である。勿論この第一の事由と第二の要件とは一應別個獨立の條件である。前者は專ら銀行間及び顧客間に成立する支拂流通の特殊の連鎖關係に基づくものであり、後者は專ら社會的流通規模の擴大に、從つて再生産規模の擴張に、直接關聯する事柄である。從つて一部資金が遊離するといふことは、必ずしもそれが貸付けられ他用されるといふことを必然ならしめない。使途のない遊離資金は、遊資として保藏されるより外はないであらう。唯、産業界に資金需要の生ずる場合にのみ、營利企業たる銀行は勇躍して第二の過程に移行しうるのである。ところがこの第二の過程はいかに遂行されうるか？　さしあたり我々は、遊資は直接投資されずして、專ら貸付けられるものとして論を進めよう。

遊離した資金を貸付ける方法には當然に二つの操作が考へられる。第一は現金をもつて直接貸出す方法であり、第二は貸出された資金を直ちにこの銀行の出納勘定に振替へる方法である。第一の場合には

遊資は一括的に銀行より流出し、これに反して第二の場合には、こゝに新らたに、貸付取引を介して間接的に設定せしめられる實質的振替預金が成立する。顧客はかくして成立した間接的實質預金に基いて新しく振替取引を營むであらう。

我々はこの場合遊離した資金貸付の方法として專ら後者の方法のみを問題としようと思ふ。蓋し第二の方法は理論上樞要なるのみならず、實踐上壓倒的であるからである。先にも述べた如く出納勘定の遊資は、手形交換乃至は自行內の記帳的移轉に基く無現金取引に由來するものであるから、苟くもかゝる遊資の處分が問題とされる歷史的時期においては、一般にその前提たる無現金操作は可成の規模において發展してゐなければならない。換言すれば振替取引そのものが社會一般に普及してゐなければならぬ。產業家の收支は通常銀行の出納勘定を通じて行はれるであらう。從つて彼等は需要する資金が直ちに出納勘定に繰入れられることを希望するであらうし、銀行も亦その方法を至便とする。貸越取引、預金設定等の各種の出納預金的貸付形式は當然にかゝる志向を助長するであらうし、又それらはかゝる志向の案出した結果でもあるだらう。振替制度の構造を發展的に考察せんとするこの小論においては、當然に遊資の出納預金的貸付をこそ問題とすべきである。ではかゝる迂路を介して新らたに成立した間接的な出納預金はいかなる性質・構造を有するか？

この場合前例に從つて最初の直接的預入に基づく實質預金をd、準備率をrとする。從つて、遊離せ

る實質預金は $d(1-r)$ である。今この遊離した現金の全部が、貸越取引・創設的預金の方法によつて貸付けられるとすれば、出納預金は最初の d の外に新らたに $d(1-r)$ を加へるであらう、いふ迄もなくこの $d(1-r)$ は空虚なる名義としての預金ではなく實質性の預金である。蓋し遊離した現金が再び出納預金として貸與されたのであるから、これに反して現金 $d(1-r)$ を除かれた最初の預金 d は $d(1-r)$ の擬制預金と dr の實質預金とに二分される。預金名義は總額 $[d(1-r)+dr]+d(1-r)$ となるであらう。換言すれば $d(1-r)$ に關して預金は二重化される。勿論預金實體として二重化されるのではなく、記帳上の名義において二重化されるのである。一つは預金の他用によつて生じた空虚なる擬制預金、他は他用された預金によつて新らたに設定された實質的預金。二者は嚴密に區別されねばならない。

尤も右は、預金實質の虚實に卽して區別したのであるが、尙この場合預金成立の樣式に卽しても區別することができる。當初の預金は顧客自ら現金を預入することによつて直接成立した預金である。それは直接性の預金である。ところがその一部が貸付られ振替へられることによつて成立した出納預金は、貸付取引をその成立の必須の條件として介在せしめるから、正に間接性の預金である。前者は直接的實質預金、後者は間接的實質預金である。而して直接的實質預金の一部他用の後に名義上の殘存として成立する空虚なる預金は、直接的擬制預金であらう。

我々はこの小論を初めるに際して豫め二つの預金を區別しておいた。卽ち投資預金と出納預金とを。そしてこれに對應して銀行業務は貸付（乃至は投資）業務と貨幣取引業務に區別された。然し今やこの二者は混融する。本來出納目的をもつて預入された預金も、一部は放資することができる。從つて銀行はこれに利子を附することができる。出納預金は投資預金となり、これを運用する銀行業務は、貨幣取引業務から貸付業務に推移する。と同時に、銀行はこの遊離した資金を當座貸越乃至は預金創設の形で貸付けるのであるから、この投資預金は出納預金として利用せられる。卽ち出納預金に發した餘剩資金は投資預金となり、再轉して再び出納預金に回歸する。換言すれば、この遊離した出納預金は、出納預金として貸付けられる、乃至は出納預金の形式をとる投資預金となる。從つてかやうな間接預金は、二つの取引の複合であるといふべきであらう。第一次的には貸付取引であり、第二次的に貨幣取引でありそして二者の合一である。間接預金においては、預金の二形式及びこれに照應する銀行業務の二形式は互ひに混融し一見複雜なる構成をとるのである。

尤もこの場合の間接的實質預金 $d(1-r)$ に對しては、最初の d に對すると同一の事情が生じうるであらう。卽ち若しこれに對する支拂準備率が從前と同樣でよいと假定するならば、この第二次の實質預金 $d(1-r)$ の中、$dr(1-r)$ が支拂準備として留保せられ、$d(1-r)^2$ が再び他用可能の遊資となるであらう。そして若しそれが貸付けられるならば、そのあとには再び $d(1-r)^2$ の擬制的預金が成立

し、若し出納預金の形で貸付けられるならば$d(1-r)$の第二次の間接預金が生ずるであらう。勿論この場合、遊資を生ぜしめる條件とこの遊資を流通に吸引し去るところの條件とが、嚴格に充されてゐるものと假定されてゐることはいふ迄もない。そして若しかうした二條件が、その後も尙依然として滿足され、繼續的に遊資及びこれに基づく預金を成立せしめるものと假定すれば、その系列は自ら次の如き無限等比級數を示すであらう。

（第一次直接預金）（第一次間接預金）（第二次間接預金）

預金　d　＋　$d(1-r)$　＋　$d(1-r)^2$　＋……$=\frac{d}{r}$

支拂準備　dr　＋　$dr(1-r)$　＋　$dr(1-r)^2$　＋……$=d$

從つてこの場合の直接預金はdであり、間接預金の總額は$\frac{d}{r}-d=\frac{d(1-r)}{r}$である。卽ちこの場合成立した遊資總額は$\frac{d(1-r)}{r}$そしてその放資によつて生じた空虛なる預金卽ち擬制的預金總額も亦$\frac{d(1-r)}{r}$である。卽ち最初に預入された現金dはそれが遂に一切の擬制預金の支拂準備として用ひ盡くされる迄に次々と間接預金として放資せられ、結局預金總額$\frac{d}{r}$の準備として銀行の手に留保される。從つてこの場合の實質的預金はdであり、この基礎の上に$\frac{d(1-r)}{r}$の擬制的預金（從つて又間接預金）が構築され、この二者相合した預金總額$\frac{d}{r}$の基礎の上に、この規模における振替取引が行はれることになるのである。[註一]

註一　右の如き事實を目して信用創造であるとする說がある。例へば、ハイエクの如き。(Hayek, Monetary Theory and the Trade Cycle, 1933, pp. 157—163) 然しかくの如くして成立する信用の膨脹は、振替技術の發展が可能ならしめた遊離せる實質預金の放資に基づくものである。それは創造信用ではなくして遊離せる現金の他用である。(Vgl. V. F. Wagner, Geschichte der Kreditheorien, 1937, S. 154, Kassenmässige Kreditschöpfung) 尤も結果的に見れば、dの預金は $\frac{d(1-r)}{r}$ の預金創設を可能ならしめるかの如く見えるが、銀行は、受入れた實質預金をもつて一擧にかゝる規模の預金創設を行ふものではなく、愼重なる經驗的模索の結果、遊離資金の轉用によつて、一つの極限としてこゝに迄到達するのである。この點他日再論する豫定である。

七　出納預金の現實的機構

我々は次に、先に留保しておいた第二の設問、即ち遊離した預金 d(1−r) の放資後における振替操作如何を考究しなければならないが、然しこの場合唯考察の對象をdの規模の振替操作のみに、限定すべきではない。遊離した預金 d(1−r) が再び貸付けられることによつて出納預金に繰入れられ、預金總額が d+d(1−r) となるかも圖られない。進んではこの規模の振替取引が更に遊資を生ぜしめ、これが再び出納預金に轉化する場合も可能である。要するに振替取引は、dから極限 $\frac{d}{r}$ 迄種々の規模において遂行され、此と共に遊資は d(1−r) より零に至る迄種々の大いさにおいて存在しうる。實際において出納預金の規模が幾何になるか、又これに合せて遊資の量が幾何になるかは、時々の事情が決定するであら

う。ともあれ我々は振替取引の規模が一定の極限を有する可變量であるといふことを知るのである。さしあたり簡單の爲に極大量$\frac{d}{r}$の場合をとつて考察しよう。

いふ迄もなくこの場合の預金$\frac{d}{r}$は二つの部分から構成されてゐる。$\frac{d(1-r)}{r}$の擬制預金とdの大いさの實質預金とより。而してdが最初の直接的實質預金に負ふものであり、$\frac{d(1-r)}{r}$が間接預金と關聯することは既に述べた如くである。振替取引はかゝる構成をとる預金を對象としてこゝに遂行される。

先づ振替取引には現金の流出を伴ふ場合がある。手形交換が負となる場合、乃至は小切手によつて直接現金が請求される場合には、現金は流出する。例へば甲銀行の顧客Aが振出した小切手が交換において現金を請求される場合には、甲銀行は豫め準備しておいたdなる實質預金の中から此を支拂ふ。小切手が預金勘定を有せざる人の手に渡り、直接現金支拂が要求される場合も同樣である。これに反して、交換が勝となる場合、乃至は現金の直接的預入のある場合には、逆に現金が流入する。例へばAが甲銀行に預入した乙銀行宛小切手が交換において乙銀行によつて現金をもつて支拂はれるとすれば、Aによるこの小切手の預入は直接的實質的預金である。蓋しこの振替取引によつて乙銀行の現金が甲銀行のAの預金勘定に加はるのであるから。これを要するに現金の流出入は實質預金の增減であり、かゝる結果を伴ふところの預金は直接的實質的預金である。（銀行の自己資本は今の場合捨象する）尙、現金準備はかゝる流出入と共に或ひは大となり或ひは少となり、然かも一定の平均水準を維持すべきである。若し

現金の流出が著しく大であるときには貨出の一部は回收され、反對に流入が顯著であれば信用の擴張が行はれる。

これに反して、銀行間の相殺乃至は同一銀行內の記帳的移轉が行はれる場合は複雜である。勿論これらは現金の移動を生ぜしめない。Aが甲銀行に預入した乙銀行宛の小切手が、Bが乙銀行に預入した甲銀行宛の小切手と相殺される、といふことが行はれる。Aは甲銀行の帳簿において、Bは乙銀行の帳簿において、直接性の預金をなしたことになつてゐる。然かも現金は少しも移動しない。それは單なる名義としての直接性の預金であるから、正しく直接的擬制預金である。同樣にしてAが甲銀行宛に振出した小切手を、乙が甲銀行における自己の口座に預入する場合も（乙が甲銀行とも取引關係があるとして）亦直接性の擬制預金であらう。なぜなら、かゝる預金の爲には現金の實質的移動を必要としないから。かくて今や、現金の直接的預入とならんで、それをも壓倒し去る程に尨大な擬制預金の直接的預入が行はれる。その規模は今の場合、最大限$\frac{d(1-r)}{r}$であらう。蓋し$\frac{d(1-r)}{r}$が無現金取引の行はれうる極大であると假定されてゐるのであるから。

我々は最初預金振替制度の究明を初めるに際して、直接的預金はすべて現金による實質預金であると假定してきた。今や我々はこの假定を撤回しなければならぬ。振替制度が發展し、無現金取引が廣汎なる規模において行はれるや否や、振替取引は擬制的預金に基いても行はれうる。預入される預金には實

質預金もあれば擬制預金もある。勿論預金を管理する銀行は、どの預金が實質預金であり、どの預金が擬制預金である、と一々について吟味するのではない。唯これを一括的に、預入された預金の中幾何が現金の流入を伴ひ幾何が記帳上の預金に終つたかを留意して、預金總額に對する一定率の現金準備の保持に努力する。換言すれば、預入される預金の虛實を詮議する代りに、專ら問題を預金と支拂準備との量的比率關係の問題に解消せしめてしまふのであるが、勿論かやうな皮相的な假象の背後に、預金における虛實の差違が牢固として嚴存してゐることはいふ迄もない。預入される預金は或る場合には實質的預金であり、或る場合には擬制的預金である。唯かやうな諸種の取引の總計として、結果として、銀行の預金中には、現金として保有される部分と然らざる部分とが生ずる。そして現金として保持されてゐる部分は、他の空虛なる部分の支拂準備として利用せられ、更に剩餘があれば、遊資として放資される。卽ち預金の虛實の問題は、實踐家の間においては、單なる預金と支拂準備との數量的關係に解消せしめられ、實質的預金と擬制的預金との科學的區別の代りに、二者の間の單なる比率關係が、支拂準備率決定の問題として、經驗的に探索される。そして單にそれのみである。然しかゝる量的指針は、預金の構成における深い內面的區別と聯關との上に根柢をおくものであつて、擬制的預金を成立せしめる各種の條件の複合の上に、これらの諸條件の外部的徵章乃至は指標として、一定の數量關係として、初めて確定されるものである。然しともあれ、直接的預入が、實質預金としてのみならず擬制預金としても

遂行されるに至つて、擬制預金はもはや偶然的存在ではなくて、振替取引に必至なる固定的・永久的存在となる。それは單なる名義としての預金であるにも拘はらず、Aの預金者からBの預金者へ、甲の銀行から乙の銀行へと、その所有者と管理者とを變更する。擬制預金は、觀念的存在であるにもかゝはらず、恰かもそれが獨立性を有し、從つて購買力の實體であるかの如き現實性をうるのである。この事から後に述べる様な預金貨幣の本質に關する諸種の誤解が生ずるのであつて、特にこの擬制的預金の現實性と實質預金の現實性とが、全然その趣を異にすることは注意すべきである。

既に述べた如く、擬制的預金成立の根據は記帳上の振替乃至は相殺による無現金的振替操作に因由する。預金が實體的に現存することなくして振替取引が行はれうるといふことから、實質的預金の一部は遊離し、そのあとに名義としての預金が殘存することになる。振替取引はかゝる觀念上計算上の預金を對象として爾後現實に遂行されうる。卽ちこの場合、無現金的振替機能乃至は流通操作それ自身が、一つの現實的貨幣流通と觀念され、かく貨幣化された操作乃至は機能が、機能上の定在として無體的現存性をうるのである。擬制預金の現實性とはかゝる無體的現存性である。實質預金の現實性の如くに、有體的現存性ではない。

先に我々は、預金貨幣は預金貨幣として機能するに先立つて、換言すれば、預金されるの當初既に貨幣であると述べた。ではそれ自身名義的であるこの擬制預金は、いかなる意味において貨幣であるか？

我々は右に述べた所を基礎として次の如くに答へようと思ふ。

擬制的預金は、勿論現實的な預金であるが、然しその有體性乃至は具象性を捨象されたる自身抽象的なる貨幣である。既に繰返し述べた如く、相殺や記帳的振替は、預金より有體的現存の必要を免除する。預金實體は他の用途に放資され、後には具象的實體性を捨象されたる單なる名義としての預金が殘留する。從つて實質預金が本來的なる完全貨幣であるとすれば、[註一]擬制預金は派生的乃至は抽象されたる不完全貨幣であるといふべきであらう。勿論、この不完全貨幣が貨幣たりうるのは、實體性抽象の條件たる無現金取引の存在の結果であつて、その逆ではない。擬制的預金が無現金取引を可能ならしめるのではなく、却つて特殊の無現金的振替操作がその機能的定在としての抽象的擬制預金の成立を可能ならしめるのである。從つて相殺や自行內振替が行はれざる場合には、換言すれば、擬制的預金存立の條件が整はざる場合には、擬制的預金はもはや抽象的たることはできない。現金を手配することによつてこれを具象的實質預金に轉化せしめねばならない。一般に銀行によつて保持される現金はかゝる場合の爲の準備である。換言すれば現金準備は、實質性を捨象されたる擬制預金の爲にその抽象性を防衞する兌換準備である。關係は恰も銀行券と金準備とに類似してゐる。そしてかゝる基本的聯關は金融恐慌乃至は貨幣恐慌の際に歷然として露呈される。

要するに現實の出納預金の構造は、兌換の基礎としての具象的完全貨幣と、その上に立つ抽象された

る不完全貨幣の二面的構成として成立してゐる。勿論前者が始源であり、後者が前者より有體性を捨象されることによつて生成せる派生物である事はいふ迄もない。[註二]從つて擬制的預金は、構成的聯關に即しては上層的・發生的聯關に即しては派生的である。發生的聯關は構成的聯關となつて現實の出納預金構造の中に維持されてゐる。而してもし此を逆に、乃至は平盤的に、先づ擬制的預金の理論的研究に初めその修正的要素として現金取引を問題とするならば、ハーンの如き架空の歸結を生ずるであらう。[註三]又同樣にして、擬制的預金を完全乃至は純粹貨幣と考へ、その抽象性を貨幣本質とみなし、貨幣の具象性は貨幣本質に偶然外殼的な附加物であると事態を逆轉するならば、リーフマンによつて代表されるやうな貨幣抽象學說が生ずるであらう。[註四]

註一　こゝに完全貨幣といふのは抽象的な擬制的預金に對して相對的意味において完全といふのである。何が本來的に完全であるかは、この小論では說き及ばない。

註二　預金を發生的な見地から見て、本源的預金（primary deposit）と派生的預金（derivative deposit）に區別するフイリツプスの態度は、この限り正しい。（Phillips, ibid., pp. 40—41）然しかゝる發生的先後關係に着目する區別は、當然に預金實質の區別を看却する缺陷がある。フイリツプスが本源的預金に、「他銀行宛に振出された小切手及び手形の如き容易に現金にかへうべき等價物」を含ましめるのは、かゝる不透明な立脚地を自白するものであらう。容易に現金にかへうべきものは、決して現金とは同一ではない。

註三　「我々はかゝる無現金經濟に對して我々の理論的成果を收め、然る後において初めて、貨幣が多くの市場にお

いて現實に尙或る役割を演じてゐるといふ事實を修正的要素として、それはそれで考察するであらう」(Hahn, ibid., S. 25)

註四　リーフマンによれば、貨幣の交換經濟的機能は一般的交換手段たる事にあるが、然し今日においては、一般的交換手段たりうるものは、有形的具體的貨幣たる鑄貨、紙幣、銀行券等のみに限られない。現時の交換取引の大部分は小切手、手形、振替、相殺等々の無形的な支拂方法、從つてその基底となる一つの抽象的計算單位によつて行はれる。かくて「貨幣は、交換取引に織込まれた人々が、効用と費用との對比をそれに結びつけ、又價格や所得が……それにおいて表現される觀念（Idee）、抽象物（Abstraktum）即ち一般的計算單位(allgemeine Rechnungseinheit) である」(Liefmann, Grundsätze der Volkswirtschaftslehre, II. Bd. S. 96) 然しリーフマンの所說は、特殊としての擬制的預金にのみ妥當する貨幣の抽象的性質を貨幣一般の性質に迄擴充した、不當なる論理の擴充である。

尙我々はこゝに擬制的預金に內包された信用關係を明らかにしておき度いと思ふ。初め述べた如く、實質的預金振替は既に二重の性質を有してゐた。先づ物に卽して見れば、それは實體的に現存する貨幣とこれに振宛てられる小切手との物と物との相互補足的全體であると表象された。これを主體間の關係として見れば、その內實は預金に對する寄託上の債權債務關係である。勿論主體間の關係はこの物の關係の中に具象化されてゐる。では擬制的預金においてはこれらの二面的特質はいかに發展的に變容されてゐるか？　第一の關係については右に述べた如くである。それはいふ迄もなく具象性の預金の抽象性の預金への轉化であつた。では第二の信用關係の變化はどうであるか？

擬制的預金においては、小切手の振宛てられる對象が實體なき抽象貨幣であるから、小切手の中に對象化されてゐる要求權も亦名目的である。預金は既に實體なき單なる名義、即ち寄託上の債權債務關係をいひあらはすにすぎぬから、[註二]これを指圖する小切手の內實も亦、要求すべき實體なき單なる債權乃至は債務となるであらう。小切手による購買乃至は支拂は、單なる債務による購買であり、支拂であり、こゝに純粹に信用的なるものが內實となる。勿論小切手は、實質的預金振替においてすら既に信用貨幣であつたが、然しその場合の信用關係は尙要求すべき實體を有する充實せる要求權であつた。然るにこの場合の信用關係は、全く空虛なる要求權そのものである。乃至は貨幣名義或ひは抽象的貨幣に對する要求權そのものである。[註二]小切手に內包された信用關係は、こゝに要求の具象的對象性を失ひ、純化されたる信用そのものに迄昇華する。勿論かゝる信用そのものが一般に小切手や預金や更には貨幣の本質となるものではなく、逆に擬制的預金において信用關係がその對象性を失ふのである。從つてハーンの如く、信用關係を絕對化し獨立化し、これを一般に貨幣の本質とするのは、その動機は何であれ明らかに失當であらう。[註三]

註一　「かゝる銀行は自分に對する貨幣引渡の要求權（claims）を創設する、即ち後に我々が預金と稱するものを二樣の方法で創設する」(Keynes, ibid., pp. 23—24)

註二　ホートレーの次の言は擬制的預金の信用的側面を洞破せるものである。然し唯それのみである。「銀行信用は

單に債務（debt）にすぎない。唯それは、諸他の債務と、債務を他の債權者に移轉するに當り銀行業者によつて便宜が與へられるといふ點で、異なるのみである」（Hawtrey, Currency and Credit, 2 ed. 1923, p. 5）「銀行は、彼の顧客が後日彼に對して負ふ債務と交換に、顧客に對する直接の債務を引受ける。銀行の債務乃至は『銀行信用』は顧客の必要に應ずるものである。何故ならそれは支拂手段として讓渡されうるのであるから」（ibid., p. 9）

註三　「小切手勘定乃至は振替勘定は、本位貨幣に轉換されない場合には、又その限りにおいては、貨幣に對する權利ではなくて貨幣それ自身である。然かも要求權は讓渡するだけで兌換されないといふ前提は、大部分の小切手勘定振替勘定について事實である。それにも拘はらず、それを、貨幣に對する要求權と解するのは、以前より銀行券の性質に關する疑問に答解する際なされたと同一の誤解を犯すことである」（Hahn, ibid., S. 19.）

結　語

以上我々は預金振替制度の最も原始的なる形態に初めて、その完成せる今日の無現金的振替取引に迄說き及んだ。現金の直接的預入に基づく實質的預金振替は、實質性を缺く擬制的預金振替制度に迄進展した。と同時に、預金の古典的形式である實質預金は、尨大なる擬制的預金の基礎となり、歷史的發生的聯關は今日では出納預金の構成的聯關として今尙保持されてゐる。換言すれば、我々は現金準備の中に無現金取引の發生的起源と構成的基礎を見出すことができ、擬制預金の中にそれより派生し、それによつて維持されてゐる現代信用制度の輪奐を見るのである。通常銀行實務家の腦裡において預金と支拂

準備の數量關係の問題として意識されてゐる事態の底には、實はかやうな複雜なる發生的構成的諸關係が隱くされてゐることは注目すべきであらう。